

人間社会学部

# 試験問題冊子

(A日程 2月1日)

## 国語

注 意

- ① 試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開かないこと。
- ② 問題冊子に落丁、乱丁があった場合は、試験監督者に申し出ること。
- ③ 試験監督者が試験開始の指示をしたら、ただちに解答用紙の所定欄に、受験番号を記入し、マークすること。
- ④ 解答は全て解答用紙に記入すること。
- ⑤ マーク式解答欄および裏面の記述式解答欄の指定された箇所以外は使用しないこと。
- ⑥ 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

注意 解答はすべて各問の下端の [ ] 内に指示された解答欄にマークまたは記入すること。なお、解答欄のうち、この試験で使うのは、マーク式解答欄の [ 1 ] ～ [ 14 ]、記述式解答欄の [ A ] ～ [ J ] のみである。

問題一 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

話の順序として、最初に地政学とは常識的にはどのような学問として紹介されているのかを、『広辞苑』（二〇一八年発売、第七版、岩波書店）から引用します。

「地政学(Geopolitik、ドイツ)政治現象と地理的条件との関係を研究する学問。スウェーデンのチェレン（一八六四―一九二二）が首唱<sup>1</sup>。主にドイツにおいて第一次世界大戦後の政治的関心と結びつき、ハウスホーファー（一八六九―一九四六）によって発展、民族の生存圏の主張がナチスに利用された。地政治学」

いくつかの点を補足します。

地政学という名称を考案したのはルドルフ・チェレンですが、その学説はドイツ人のフリードリヒ・ラッツェル（一八四四―一九〇四）の理論を継承し、発展させたものでした。チェレンが継承したラッツェルの理論のタイヨウ<sup>2</sup>は、次のようなものです。

「国家は単なる国民の集合ではない。国力はその面積に依存し、国境は内部同一性の境界線であると同時に、国家の成長にしたがって国境も流動的に変化するものである」  
ラッツェルは国土（国境線）は民族（その言語や文化）の増大によって、流動化して当然だと考えたのでした。

このようなラッツェルの理論を、チェレンはさらに発展させる形で、『生活形態としての国家』という論文（一九一六）を発表しました。すなわち彼は国家を、高度な生命組織体として位置づけたのです。それは経済的な [ a ] の問題を提起したことでもありました。「国家は高度な生命組織体である以上、国民の基本的な要求は、その領内の固有の資源で満たされるべきである」ということになります。そしてチェレンは、国家を生命組織体として考える理論を「地政学」と名付けました。

[ b ] によって提起され、 [ c ] によって地政学として骨格を形成した学説を、さらに大系化したのが、 [ d ] というドイツ人です。彼の学説は概略、次のようなものです。「国家は、その国力に応じてエネルギーを得るための領域、すなわち『生存圏』を獲得しようとするものである。それは国家の権利である。 [ e ] 『生存圏』とは別に、『経済的に支配する地域』の確立が必要である」

このようなハウスホーファーの理論を知ったアドルフ・ヒトラー（一八八九―一九四五）は、その理論をみずからの政策に取り入れました。第一次世界大戦で敗れたドイツは、米英仏を中心とする連合国側に対して、次のように主張したのです。ヨーロッパに生存圏を有しないドイツは、生存するために軍事的な拡張政策を進めねばならないと。

『広辞苑』の文章は、以上のような内容をカンケツ<sup>3</sup>にまとめています。ハウスホーファーについて付言すれば、彼は第一次世界大戦前は、陸軍の現役の軍人でした。一九〇八年から一九一〇年まで、駐日ドイツ大使館付武官として日本に駐在しています。彼は日本に深い関心を示し、その文化や歴史も学びました。日本陸軍とも親交を深め、彼の地政

学的な理論は、陸軍の戦略に多くの影響を残すことになったのです。また、ハウスホーファーは第一次大戦後にミュンヘン大学の教授となりました。そのときの教え子のひとり、後にヒトラーの側近となったルドルフ・ヘス（一八九四―一九八七）です。彼との縁でハウスホーファーは、ヒトラーとも交流がありました。ヒトラーが彼の「生存圏」の理論を、f的に曲解することを憂慮していたとも伝えられています。

しかし、生存圏という理論が、ナチズムにとって利用しやすい理屈であることは容易に推測できます。ドイツにとっての生存圏は正義であっても、侵略される側の他の民族や国家にとっては厄災<sup>4</sup>そのものとなります。

ところで『広辞苑』の地政学についての解説は、必ずしも満点とは言い難い点があると思います。

『広辞苑』が取り上げていないふたりの地政学者がいます。アルフレッド・セイヤー・マハン（一八四〇―一九一四）とサー・ハルフォード・ジョン・マッキンダー（一八六一―一九四七）です。このふたりは自分たちの学説を「地政学」とは呼んでいません。そのために言葉の意味を説明することを重要な役割とする『広辞苑』では、マハンとマッキンダーを取り上げなかったとも考えられます。

しかし現代の地政学についての学界の評価では、チェレンからハウスホーファーにつながる地政学ではなく、マハンとマッキンダー<sup>ア</sup>の理論が高く評価されています。

マハン<sup>ア</sup>はアメリカ海軍大学校教授の立場で、『海上権力史論』を書きました（二八九〇）。その著述が「海の地政学」として世界の注目を集めました。マッキンダーは連合王国（UK。イギリス）の人です。地理学者でもあり政治家でもありました。彼は地球上の大陸と、それを取り巻く海との関係から、「ハートランド」という概念を想定しました。「陸の地政学」とも呼ぶべき彼の豊かな構想は、一九一九年に発刊された『デモクラシーの理想と現実』の中に余すところなく描かれています。今日ではマッキンダーは「現代地政学の祖」と呼ばれ、地政学の基礎的な理論付けは、彼によってなされた<sup>ア</sup>と評価されています。付言すれば、bに始まりdに至る、ドイツを中心とする地政学は、ドイツの軍事的興亡と表裏一体でもありました。オットー・フォン・ビスマルク（一八一五―九八）の豪腕が生み出したともいえるドイツ帝国（一八七―一九一八）から、第一次世界大戦そして第二次世界大戦に至る戦争において、ドイツが演じてしまった侵略国家の役割を外交的にも戦略論的にもバックアップしたのが、地政学の論理だったのではないか。「国家は有機体である」という理論や「生存圏」という発想が、そのことを物語っているようにも思います。

留意してほしいのは、マハンの『海上権力史論』もマッキンダーの『デモクラシーの理想と現実』も、ドイツを中心とする地政学者たちの活躍とほぼ同一の時期に執筆されていることです。

マハンとマッキンダーは、それぞれの理念を論理化していく過程で、ドイツという遅れ気味にヨーロッパに登場してきた新興国のことを意識していたことでしょう。しかし、そのことには露骨に言及せず、地球という球形の中で生きる人間の歴史と可能性について模索する、そのような思想を感じさせます。そのことがふたりの著書を「海の地政学」「陸の地政学」として世界が認めた大きな理由だったと思われる。

（中略）

ドイツ語で地政学はGeopolitikと呼ばれました。英語ではgeopoliticsです。地理学geographyと政治学politicsを、足し合わせた造語です。

地理学には自然地理学と人文地理学があります。人文地理学は、人口や都市に始まり政治や文化に至るまで、人間の自然との関わり合いの中で生み出したものを研究対象とします。

地政学とは人文地理学の一部分ではないか、などと考えるのはフキンシン<sup>5</sup>でしょうか。学問的な定義はひとまず置いておいて、地政学って何ですか？なぜ必要なのですか？と聞かれたら、僕は次のように答えています。

「ある国や国民は、地理的なことや隣国関係をも含めて、どのような環境に住んでいるのか。その場所で平和に生きるために、なすべきことは何か。どんな知恵が必要か。そのようなことを考える学問です」

しかし、もっと簡単な回答があります。

「国は引越できない」

平たくいってしまえば、それが地政学が存在する前提なのですね。

「ホモ・モビリティス」という言葉があります。京都大学の名誉教授で、自然人類学者の片山一道先生が提唱した言葉です。「移動するヒト」の意味です。人類は東アフリカで誕生して以来、食糧を求めて世界中へ移動して行きました。よりおいしいビブテキを求め、より快適な場所を求めて、ついに地球上の全大陸に移動していった動物が人類です。地球上の動物で、これほど広く分布したのは人類だけです。

移動<sup>イ</sup>すること、引越<sup>イ</sup>しすることを前提に考えたなら、地政学は存在理由がありません。だから地政学的な知恵が必要になってきたのは人間が定住し始めてからだ、と推察できます。では、いつから人類は定住しようと考え始めたのでしょうか。それは一万二〇〇〇年前頃と考えられています。その頃、人類にドメスティケーションと呼ばれる現象が起きました。人類の頭脳が少しずつ進化した結果なのか、突然変異なのか、理由は定かではありませんが、人類は食糧を追いかける生活を止めたのです。狩猟採集生活から農耕牧畜社会への転換が起こった、と考えられています。

ここは良い場所だなど思った地点に定住するようになる。だんだん人口も増えてくる。そのうち川向うに乱暴な連中が住みつくようになって、トラブルが起こり始める。二年、三年と天候不順が続いたりする。すると移動しなくなった人類は、隣人対策や災害対策に知恵を絞るようになります。こうして地政学的な問題を人類が抱えるようになります。

(出口治明『教養としての「地政学」入門』)

問1 傍線部1、4の漢字のよみをひらがなで、傍線部2、3、5のカタカナを漢字で、それぞれ記述式解答欄に記入しなさい。

1  2  3  4  5

問2 空欄  に当てはまる語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① 依存性
- ② 同一性
- ③ 持続性
- ④ 自足性

問3 空欄 、、 に当てはまる語の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① b チェレン c ラッツェル d ハウスホーファー
- ② b ラッツェル c チェレン d ハウスホーファー
- ③ b チェレン c ハウスホーファー d ラッツェル
- ④ b ラッツェル c ハウスホーファー d チェレン

問4 空欄  に当てはまる語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① さらに言えば
- ② 言い換えれば
- ③ 言ってしまえば
- ④ しいて言えば

問5 空欄  に当てはまる語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① 手前味噌
- ② 我田引水
- ③ 臨機応変
- ④ 因果応報

問6 傍線部ア「マハンとマッキンダーの理論が高く評価されています」の理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① ふたりはそれぞれ「海の地政学」「陸の地政学」を発刊したから。
- ② ふたりともドイツを中心とした地政学者と同じ時期に論文を執筆していたから。
- ③ ふたりは地球の中で生きる人間の歴史と可能性を視野に入れていたから。
- ④ ふたりは理念の論理化の過程でドイツについて意識的に言及していなかったから。

問7 傍線部イ「移動すること、引越すことを前提に考えたら、地政学は存在理由がありません」と著者がいう理由に関する説明として最も適当でないものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 6

- ① 人類が地政学的な問題を抱えるようになったのは、軍事的な拡張政策を進めたからである。
- ② 国は引越してできないからである。
- ③ 人類が狩猟採集生活を営んでいるなら、地政学が必要とされることはない。
- ④ 人類が定住するようになるのと隣人対策や災害対策に知恵を使うようになる。

問8 本文の内容に最も合致するものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

7

- ① 地理学と政治学を足し合わせて「地政学」という学問が作られた。
- ② ドメステイケーションが地政学的な問題の遠因となった。
- ③ ラッツェルは自らの生存圏の理論を「地政学」と名付けた。
- ④ 地政学は人類が狩猟採集生活から農耕牧畜社会へと転換した際に提唱された。

問題二 次の文章を読んで、あとの設問に答えなさい。

思考表現スタイルがケンチヨ<sup>1</sup>に現れるのは、学校で教えられている小論文においてである。小論文は、学術論文とは違い、主に中等教育で論述試験や思考の演習方法として用いられている。だが、この小論文の型とそこに現れる思考表現スタイルは、国によって驚くほど異なる。

三〇カ国を超える留学生の小論文の分析と類型化を行った応用言語学者のカプラン(Kaplan 1966)の研究からは、論理的であるとは、「読み手にとって必要な部分が読み手の期待する順番に並んでいることから生まれる感覚である」と結論づけられる。そして付け加えるならば、読み手にとって「必要な部分」と「期待する順番」の感覚は、自然なものでも自明なものでもない。

確かに各国で使われている小論文の構造を見ると、そこでは論文に必要とされる構成要素とそれらの要素を並べる順番は大きく異なっている。a 大きな違いとして認識されるのが、「エッセイ」と呼ばれるアメリカ式の小論文と、「デイセルタシオン(dissertation)」と呼ばれるフランス式の小論文である。エッセイは、主張とその根拠から構成されているのに対して、デイセルタシオンは、〈正―反―合〉の弁証法を基本構造にしている。b 日本の小論文はこの二つの折衷の構造のように見えながら、アメリカのエッセイをモデルにしている。論理的であることの日米の違いはよく語られるが、西洋ないし欧米と一括りに論じられることが多いアメリカと、フランスに代表される大陸ヨーロッパは、実は小論文の書き方のみを取り上げても全く別の世界であり、それぞれの思考とその表現法、それを支える言葉の教育、そして社会のあり方は大きく異なっている。まさにそれぞれの社会に特徴的な「スタイル」を持っているのである。小論文の構造の違いを見ただけでも、なぜフランス人の議論が分かりづらいと感じるのか、c アメリカ人の議論が単刀直入に聞こえるのかもすっきりと見えてくる。

(中略)

歴史を紐解けば、アメリカでも一九五〇年代まではヨーロッパ式の小論文の書き方が型として使われていた。しかし、高等教育の急激な大衆化に伴い、言語や社会・文化的な背景にかかわらず誰にでも簡便に書け、素早く採点できる大衆民主主義的な書き方が模索され、「五パラグラフエッセイ」と呼ばれる小論文の型が高等教育から初等教育まで広く受け入れられるようになった。他方フランスは、フランス革命後の新しい社会を模索する産みの苦しみの中で、これまで存在しなかった「フランス市民(国民)」という新しいカテゴリーの人間を育成するために一〇〇年あまりをかけて新たな論文の型を作り出し、改良を重ねた。デイセルタシオンは、フランスの学校教育の中で開発されたフランス起源の論文形式である。いずれの社会においても、社会が大きく変革した時に小論文の型は変化しており、社会のあり方と小論文に体现される思考とその表現方法の緊密な関係が看取<sup>4</sup>できる。社会のパラダイムシフトは、小論文のパラダイムシフトをも起<sup>1</sup>こすのである。そして社会変動は教育の変動を引き起<sup>4</sup>こす。

フランスにおいて、小論文を書くことは特別な意味を持っている。大学入試資格と中等教育修了資格を兼ねるバカロレア試験(Baccalauréat)は、すべて論述問題で構成されている。二つほどの問題を三時間半から四時間かけて解く大論述問題である。人文・

社会科学系の教科では、求められる論文の型に沿って書かないと、いくら豊富な知識を披露したり、目の覚めるような結論を提示したりしても、バカロレア試験には合格しない。とりわけディセルタシオンは、大学の学位審査試験、教員資格試験、官吏登用試験から一般の会社の試験に至るまで幅広く用いられている。この様式で書いたり考えたりできないと、中等教育の修了資格も、高等教育の学位も、職業や社会的な地位も得られない。

資格試験のみならず、ディセルタシオンの書き方と思考法の痕跡は、「事務報告から博士論文、文学的なエッセイ」にまでフランス社会のあらゆる場面で見つけることができると言われている。実際、日本の国語に当たる「フランス語」の教育は、ディセルタシオンを書けるようになるために綿密かつ段階的に組まれていると言っても過言ではない。その意味で、フランスの中等教育を終えようとする全生徒をディセルタシオンを中心としたフランス式小論文で「テスト」するバカロレアは、d になるための「思考とその表現法」を身につける通過儀礼としての機能も持っている。さらに中等教育と高等教育をつなぐ役割を担っているのもこのフランス式小論文の書き方の習得である。ブルデューとパストロンが述べるように、フランスに限らず、ある小論文の書き方やプレゼンテーションの方法がいったん試験に適用されると、その書き方や話し方はコミュニケーションのルールを規定する権威となり、さらには学校における教授法や知識そのものをも規定する権威ともなり得るのである。

さらに、フランスの小論文の型に注目するのは、それがフランス革命後の新しい社会と教育を象徴する革新的なものである一方、古代ギリシャ・ローマに根ざす論理学と修辞学の伝統を継承していること、そしてこの小論文の構造自体が矛盾を解消して、新しい考えや問題の解決を導く方法論を提示しているからである。さらには、科学パラダイムの時代と呼ばれる現代において、アメリカをはじめとする多くの国では、科学的なデータや経験を根拠として論を展開するのに対して、フランスは人文学に基づく古典や共通教養を根拠として論を展開し、結論を導く。革命後もフランスは人文学の論理を優先させる伝統の根を捨てなかった。科学とは異なる知恵と問題解決の方法がそこにはある。科学は「価値」について語るスベを持たないが、弁証法は科学がカバーできない分野の問題解決を得意とする。

弁証法はヨーロッパの複数の国で論文の基本構造となっているが、英語、とりわけアメリカ英語が世界語としての機能を持つようになった二一世紀では、五パラグラフエッセイでもものを書く人口は、圧倒的に多いと推測できる。これまでフランスをはじめとするヨーロッパに留学する学生は、各国の言語とともにまずこの弁証法を用いた論文の書き方を習得しないと、高等教育で学位が取れなかったが、ヨーロッパの大学でも英語のみのプログラムで学位が取れるようになると、こうした思考法の根本的な違いはますます見えにくくなっている。しかし、アメリカに代表される英語圏の書き方や思考法のみを学んでいては、世界の半分以下しか見ていないことになる。だからと言ってフランスの方法が普遍的な価値を持つと主張するつもりはなく、むしろ古代ギリシャ・ローマに根を持つ方法を掘っていくと、フランスという特異な歴史体験を持つ共同体の「地域性（ローカルなもの）」に突き当たると考えた方が良いだろう。

問1 傍線部1、5のカタカナを漢字に、2、3、4の漢字の読みをひらがなに直して、それぞれ記述式解答欄に記入しなさい。

1  2  3  4  5

問2 傍線部ア「自明なもの」の「自明」の意味として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① 経験から導き出されるもの
- ② もって生まれた性質
- ③ 証明したり特に詳しく説明したりするまでもなく明らかなこと
- ④ 実証不可能な事柄

問3 空欄    に当てはまる語の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① a しかし b さらに c たとえば
- ② a とりわけ b たとえば c 同様に
- ③ a すなわち b ちなみに c たとえば
- ④ a とりわけ b ちなみに c その一方で

問4 傍線部イ「社会のパラダイムシフトは、小論文のパラダイムシフトをも起こす」の例として著者が説明している内容について最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① フランスは、フランス革命後の新しい社会を模索する産みの苦しみの中で、社会が大きく民衆化した。
- ② アメリカでは、高等教育の急激な大衆化に伴い、「五パラグラフエッセイ」と呼ばれる小論文型が広く受け入れられるようになった。
- ③ アメリカとフランスは、小論文の書き方のみを上げても、全く別の手法で教育する。
- ④ 歴史を紐解けば、アメリカでも一九五〇年代まではヨーロッパ式の小論文の書き方が型として使われていた。

問5 傍線部ウで著者が「いくら豊富な知識を披露したり、目の覚めるような結論を提示したりしても、バカロレア試験には合格しない。」と述べている理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① フランス式小論文の書き方を習得し、求められる論文の型に沿って書いていなければ合格できないから。
- ② フランスにおいて、小論文を書くことは特別な意味を持っているから。
- ③ デイセルタシオンは、フランスの学校教育の中で開発されたフランス起源の論文形式であるから。
- ④ バカロレア試験は、すべて論述問題で構成されているから。

問6 空欄  に当てはまる語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① エリート
- ② 教員資格取得者
- ③ 官僚
- ④ フランス市民

問7 傍線部エについて、著者が「フランスの小論文の型に注目する」理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① フランスは科学的なデータや経験を根拠として論を展開することを重視しているから。
- ② 革命後もフランスは人文学の論理を優先させる伝統の根を捨てなかったから。
- ③ フランスでは、科学について弁証法で語るから。
- ④ フランスでは、五パラグラフエッセイでもを書く人口が圧倒的に多いから。

問8 本文の内容に最も合致するものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① 社会のあり方と小論文に体现される思考とその表現方法の関係は全く別世界のものである。
- ② アメリカ英語が世界語としての機能を持つようになった二一世紀では、五パラグラフエッセイでもを書く人口は、圧倒的に多いと推測できるから、その手法を学ぶことが重要である。
- ③ 小論文の型とそこに現れる思考表現スタイルは、社会のパラダイムの変化によって変化する。
- ④ アメリカとフランスで小論文の型とそこに現れる思考表現スタイルが異なるのは、アメリカではフランスほど大学入試資格が重視されないからである。

(以上)